第３学年〇組　外国語科学習指導案

指導者　髙木 翔平

1　単元 「アイディアで世界を救う」（New Crown3 Lesson6 との関連）

2　指導観

〇　物理的に離れた相手と、オンライン上でお互いの顔を見てコミュニケーションを取ることが、コロナ禍をきっかけに一般化した。しかし、一昔前に、このようなコミュニケーションができることは、多くの人にとって空想上の出来事だったと考える。想像力を働かせ、今現在にはない斬新なアイディアを仮定したり想像したりすることは、世界で起こっている問題を解決する可能性がある創造的な活動である。その際、現在の事実に反する仮定や、現段階では実現の可能性が乏しい想像を表現するために、仮定法過去の表現が必要となる。仮定法過去は現実にはない仮定や想定を表現することができ、直説法の条件文では正しく伝えることができなかった状況を説明することができる。すなわち仮定法を学習することで、これまで曖昧にしか表現できなかった状況を、より正確に表現することができるようになる。

　本活動は、「アイディアで世界を救う」という活動を通して、仮定法過去を用いて、世界の問題を解決できる斬新なアイディアを、グループで想像し、説明し合う活動である。本活動を通して子どもは、現実とは異なる状況や想定を表現できるようになる。また、今後の世界の変化を想像しながら、人類にとってよりよい世界を表現し、語り合うことができるようになる。すなわち、仮定や事実と自分の考えを織り交ぜながら、協働的に問題解決に取り組む姿につながるため、大変意義深い活動である。

〇　本学級の子ども（〇名）は、レディネステスト（〇名回答）で、既習の直説法の条件文を表現する問題で、すべての子どもが if を使って表現していた。その中で、未来を表す条件文を現在形で表現できていた子どもは、〇名で、will を使っていた子どもが〇名だった。また、could や would を活用する問題の正答率は、約〇%だった。さらに、Can you~?と Could you~?の丁寧さの差異を尋ねたところ、答えることができた子どもは〇名だった。また、７月に行ったパフォーマンステストでは、ALT の質問にその場で返答できた子どもが〇名いた。〇名が、質問は理解しているが返答の内容に困っていた。

　以上のことから、「もしも」という仮定の表現をするときに if を用いることは、全員に定着していることがわかった。一方で、助動詞の過去形については、曖昧になっている子どもがいることがわかった。したがって、単純過去や条件文と仮定法の文を比較しながら、学ぶことができるようにする必要がある。さらに、条件文の時制を混同している子どもが多くいることがわかった。これは、英語の時制の整理ができていないからだと考えられる。したがって、時制の概念に触れながら、具体的な場面や状況の中で学習する場面を設定する必要があると考える。また、会話の中で次に話す内容を考えることができるように、聞いたことを日本語を介さずに、理解することができるように援助する必要があると考える。

〇　本活動では、アイディアで世界を救うことに関心と見通しを持ち、仮定法過去に関する知識を活用し、世界の問題を解決することができるような仮想の世界を想像し、説明することができるようにすることをねらいとする。そのために第一次では、アイディアで世界を救うことに関心と見通しを持つことができるように、動画を視聴し、仮定の話をする場を設定する。第二次では、仮定法過去の表現を理解することができるように、タスクを設定し、やり取りの中で活用する場を設定する。また、世界の問題を解決できる仮想の世界を想像することができるように、アイディアを交流し、まとめる場を設定する。第三次では、自分たちの仮想の世界を説明することができるように、質疑応答の場を設定する。

3　目標

〇仮定法過去の特徴やきまりに関する事項を理解し、仮想のアイディアの話題について聞いたことについて、自分の考えを仮定法過去を用いて伝え合うことができる。　（知識及び技能）

〇相手に「これからに役立ちそうだ」と思ってもらえるように、仮想のアイディアの話題について、仮定の話や自分の考えなどを簡単な語句や文を用いて伝え合うことができる。　（思考力・判断力・表現力）

〇仮想のアイディアの話題について、簡単な語句や文を用いて、まとまりのある内容を話そうとしている。

（学びに向かう力、人間性等）

4　計画（10 時間）

次	学習活動・内容	手だての内容・方法・留意点	観点：評価規準
一	1　本単元の流れをつかむ。 （1）Osaka Expo 2025 の動画を見る。 ・Designing future society 2　学習課題を設定する。 （1）Expo の内容を把握し、活動の見通しを立てる。 ・仮想空間 EXPO in Kurume ・food, energy, environment アイディアで世界の問題を解決しよう。	・アイディアで世界を救うことに関心を持つことができるように、動画を視聴し、仮定の話をする場を設定する。 ・活動の見通しを立てることができるように、Expo の詳細を確認する場を設定する。その際、来場者やプレゼンの方法を整理する。	態：仮想のアイディアの話題について、簡単な語句や文を用いて、まとまりのある内容を話そうとしている。
本時	3　仮定法過去を学習する。 （1）仮定法過去を使ってやり取りする。 ・If I had wings, I could fly. ・If I were you, I would go.	・仮定法過去の表現を理解することができるように、タスクを設定し、やり取りの中で活用する場を設定する。	知：仮定法過去の特徴やきまりに関する事項を理解している。
二	（2）仮想の世界を想像する。 ・I wish I could fly like a bird. The Wright Brothers made the first successful fright. If we had wings, we could fly anywhere we wanted to. 4　仮想の世界をつくる。 （1）仮想世界を一緒につくるグループを作成する。 ・If we could fly in the sky, what could we do? （2）仮想の世界をつくる。 ・If we could go anywhere we wanted to, we could solve the energy problem. ・動画、字幕の作成	・世界の問題を解決できる仮想の世界を想像することができるように、モデルを提示し、必要な情報を整理する場を設定する。 ・仮定法過去に関する知識を活用することができるように、直説法と比較する場を設定する。 ・グループを作成することができるように、質疑応答をしながら、お互いのテーマを聞き合う場を設定する。その際チームをつくるという目的を明確にする。 ・世界の問題を解決できる仮想の世界をつくることができるように、アイディアを交流し、まとめる場を設定する。	思：相手に「役立ちそうだ」と思ってもらえるように、仮想のアイディアについて、仮定の話や自分の考えなどを簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書いている。 知：仮想のアイディアの話題について聞いたことについて、自分の考えを仮定法過去を用いて伝え合う技能を身に付けている。
三	5　仮想の世界を説明し合う。 （1）世界を救うアイディアを説明し、評価し合う。 ・What should we do for the food problem? （2）学習過程を振り返る。 ・どんな表現を使うことができたか。 ・どんなコミュニケーションをすることができたか。	・仮想の世界を説明することができるように、質疑応答の場を設定する。その際、実際のコミュニケーションの場になるように、ゲストを招聘する。 ・学習の成果を実感することができるように、学習過程を振り返る場を設定する。	思：相手に「役立ちそうだ」と思ってもらえるように、仮想のアイディアの話題について、仮定の話や自分の考えなどを簡単な語句や文を用いて伝え合っている。

5　本時　　第二次（２／７）　３年〇組教室

(1) 本時の指導観

子どもたちは前時までに、「もし～だったら」と仮想の世界を想像し、その世界の良さをプレゼンテーションで伝える課題を立てている。また、If I had wings, I could fly.といった仮定法過去の表現を学習している。そこで本時では、相手の立場に立って助言をすることができる If I were you~.の表現の特徴やきまりに関する事項を理解することができるようにする。

(2) 主　眼

If I were you の特徴やきまりに関する事項を理解することができるようにする。（知識及び技能）

(3) 準　備

①写真　②悩みの例のカード ③学習プリント ④仮想の世界の紹介プリント

(4) 過　程

学習活動・内容	準備	手だての内容・方法・留意点	形態	配時
1　本時の学習の方向性を確認する。 (1) Small Talk をする。 ・Topic: Do you have any worries? (2)　ある悩みに対するアドバイスを考え、本時のめあてを作成する。 ・I like her, Mary, but she likes him, Mike. What should I do? Goal：有名占い師になって、友だちの悩みを解決しよう。	① ③	・本時のテーマに関する話題や語彙を想起することができるように、ペアで会話をする場を設定する。 ・本時の活動の見通しを立てることができるように、全体でアドバイスを考え、めあてを設定する。	一斉／ペア／一斉	10
2　お悩み相談をする。 (1) 良いアドバイスの視点を出す。 ・相手の立場に立つことができる ・解決策を示すことができる (2) 相手の悩みを聞き、相談に乗る。 ・I have to study hard, but I often use my smartphone. ・My mother always says to me “Wake up early”, but I want to sleep more. (3)　アドバイスをするときに役に立つ表現を共有する。 ・ If I were you, I would give my smartphone to my mother. (4) 相手の立場に立って、友だちの悩みを解決する。 ・占い師としての反応 ・アドバイスに対する返答 (5) 学習をまとめる ・相手の立場に立つ：If I were you ~	②	・めざす姿を具体的にイメージすることができるように、良いアドバイスの視点を共有する場を設定する。 ・相手の立場に立つ表現の必要性に気づくことができるように、試しに悩み相談に乗る場を設定する。 ・表現したい内容を表現することができるようにするために、使った表現を共有する場を設定する。その際、仮定法過去に関する表現は明示的に用法を示す。 ・学習した表現を実際の会話の中で使うことができるように、全体で解決する場を設定した後に、ペアでやり取りする場を設定する。 ・本時の学習を整理することができるように、会話で活用した表現をまとめる場を設定する。	一斉／ペア／一斉	30
3　学習を振り返る。 (1) 学習を振り返り、まとめる。 ・わかったこと、次に活かしたいこと (2) 仮想世界を紹介する英文を考える。 ・If I were a Prime Minister, I would make the rule that we must use clean energy in summer.	④	・本時の成果を実感することができるように、視点をもとに振り返る場を設定する。 ・学んだことを他の場面でも活用することができるように、仮想の世界を紹介する英文を書く場を設定する。	一斉／個	10

教科論と本活動のつながりについて

福岡教育大学附属久留米中学校 外国語科 楠田　千明
髙木　翔平

１ 単元構成とタスクについて

外国語の活動・単元をつくる際には、２通りの方法があると考える。１つは、単元の導入で大きな課題(学習課題や最終目標など)を設定し、その後の時間に少しずつその課題の達成に向けて、進んでいくような単元設定である。もう１つは、単元の導入で課題を設定するが、その後の時間では別のタスクにも取り組みつつ、最終的に課題を達成できるように進んでいく単元設定である。前者の特徴としては、子どもが見通しをもって、思考を途切れさせずに主体的に課題達成に進んでいける良さがあると考える。一方で、後者は様々なタスクの中で、言語材料を活用することで、知識を一般化し、汎用的なスキルを磨くことができる良さがあると考える。実際においては、両者を使い分けながら単元を構成していくが、本発表においては、「福岡 PR 大使になろう（第２学年)」の単元は前者の考え方で単元計画をつくり、「アイディアで世界を救う（第３学年)」の単元は、後者の考え方で単元計画を作成した。

○「福岡 PR 大使になろう（第２学年)」について

一次で、京都市の令和４年京都観光動向調査から、その経済波及効果と出身国の割合を知り、「外国人観光客を福岡へ呼び込もう」という学習課題を設定した。二次前段では、「京都と福岡の共通点を見つけよう」や「最もかっこいい漢字を決めよう」などタスクを通して、言語材料である比較表現を学習した。二次後段で、修学旅行の探究班ごとに福岡をＰＲするパンフレットを作成し、三次では実際に京都での班別行動の日に、海外からの旅行者にむけてパンフレットを渡す活動を行う。

○「アイディアで世界を救う（第３学年)」について

一次で、大阪万博の動画を視聴し、「アイディアで世界の問題を解決しよう」という学習課題を設定した。二次前段では、「占い師になって友だちの悩みを解決する」「無人島に行って、生き残る」というタスクを通して、仮定法過去の表現を学習する。二次後段では、アイディアで世界を救うために、「チームをつくる」「資料を作成する」という段階を経て、自らのアイディアを紹介し合う Expo につなげていく。

２ 本時の授業について

○「福岡ＰＲ大使になろう（第２学年)」について

本時のポイントとして、以下の２点を提案する。

①ミニディスカッションの場を設定する。

生徒がその場で考えて会話を継続・発展させるためには、相手の発話を聞いている間、次は自分が「話し手」になることを想定してやり取りに参加する姿勢が求められる。自分の理解を確かめたり相槌をうったりするだけでなく、相手の答えを受けて、自分のことを伝えたり、相手の答えや自分のことについて伝えたことに関連する質問を付け加えたりすることが必要である。そのため、意見交流でなくディスカッションとして小集団内での解を出すことによって、相手の発話に関連する意見を述べたり、相手の答えに基づいて質問を行ったりする必要が生まれ、即興的にやり取りする力を伸ばすことにつながる。ミニディスカッションが即興的なやり取りとなるように、教師は意見を関連させるポイントを明示したり、質問や意見で活用しやすい表現のモデルを示したりする。

②ピア・フィードバックの場を設定する。

即興的にやり取りする力をさらに磨くことができるように、ミニディスカッションとピア・フィードバックを組み合わせる。たとえば、チームＡがミニディスカッションしている間、チームＢがその様子を参観し、ミニディスカッション後にフィードバックを行う。フィードバックが適切で有意味なものになるように、評価の視点（①自分の意見を伝える表現を活用していたか ②主張における理由や根拠は十分であったか ③相手に働きかける表現を適切に用いていた ）にもとづいて教師は

例を提示し、生徒なりの評価基準がある程度均質なものになるようにする。

○「アイディアで世界を救う（第３学年)」について

本時のポイントとして、以下の３点を提案する。

①子どもが If I were you の表現に気づくことができるように、教師のインプットを工夫する。

まず動画を視聴する場面で、If I were you の表現を教師が使う。また、指導案の２(２)の後にも、悩みを共有し、アドバイスするときに教師が If I were you を使う。その際、あくまでも「友だちの悩みを解決する」という内容に焦点を当てる。

②準備していない活動としての「悩み相談」

本時では、子どもたちは初めて「友だちの悩みを解決する」という課題に出会う。友だちの悩みに関しても、本時で初めて聞く内容である。指導案の２(２)では、文法上の正しさに囚われることなく、子どもが即興的にやり取りを行い、伝えたい内容を表現し、理解してもらうことを優先する時間とする。２(４)では、同様に内容に焦点を当てつつも、If I were you の表現を使ってやり取りする姿をめざす。

③教師の訂正フィードバック

本時では、例えば If I were you, I would give my smart phone to my mother.という英文を言うときに、If I were you, I give/ will give my smart phone to my mother.というミスが起こる可能性が考えられる。その際、recast や elicitation、必要に応じて explicit correction を行いながら正確さの度合いを上げることができるようにする。